

どとも名づく佛の座とは俗にいへるかはらけなといふものなり、すいなは菘なり、うきなをいふ、京都にてはたけな、水菜などいふもの、事なりいなかにては京菜と云、蔓菁と一類二物なり、世人多くは菘を考見べし、本草網目、農政全書等を考見べし、

〔諸國年中行事大成正月〕七日七草略○中 城州寺田村より七種の若菜を獻る、又攝州菟原郡中尾

村より七種の若菜を、西本願寺に獻る、今日民家良賤家々燗蕪、善齋等を砧几の上に置きて、細き竹管、或は筥をもてこれを敲き拍す、此時唱へて云、唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ前にと云て拍す也、秋齋翁説には古へ何某といへる人家富榮て殿造し給ひ、移徙の日其家の下司等集て、日本の富や、貴との富やと唱ひしより、今に斯傳へしなりとぞ、此菜を今朝粥に和して食す、荆楚歲時記云、正月七日俗七種菜をもつて羹とし、これを食へば萬病を除くと云々、是邪氣をのぞく術也、七種の菜とは所謂、薺、芹、藜、蕪、菘、鼠麴、蘿蔔、碎米花、

〔増補江戸年中行事正月〕七日 七種祝ふ七種はやす、七種粥を祝ふ

〔東都歲事記正月〕六日 今夜七種菜をはやす 七日 今朝貴賤七種菜粥を食す

七日例
〔枕草子一〕正月略○中 七日は雪まのわかな青やかにつみ出つ、れいはさしもさるもの、めちかからぬところにもてさはぎ略○下

〔枕草子七〕七月略○正 のわかなを、人の六日にもてさはぎとりちらしなどするに、見もまらぬ草を、子どものもてきたるを、何とかこれをばいふといへど、みにもいはず、いざなとこれかれ見あはせて、み、な草となんいふといふもの、あれば、むべなりけり、きかぬかほなるはなど笑ふに、又おかしげなる菊の生たるをもてきたれば、

つめどなをみ、な草こそつれなけれあまたしあれば、菊もまじれり、といはまほしけれど、聞

〔祇園執行日記〕正平七年元文和 正月六日、堀川神人役七種菜、沙汰人行心法師持參、ナツナク、